

# 基礎徹底 素質追いつく

あの選手 この監督

1

信州工と校名変更後の武蔵工大二（現東京都大塩尻）で42年間にわたり監督を務めた大輪弘之（74）。「最後の3年生」の1人が菊池涼介（28）だ。

広島東洋カープに入団7年目。今やプロ球界を代表する二塁手と定評がある菊池だが、「高校時代は目立つ存在ではなかった。特別な指導もしていない」と大輪は言う。徹底して教えたのが、基本的な技術と野球に取り組む姿勢だった。

それは、大輪が母校・亜細亜大で監督からたたき込まれた指導方針だ。その監督は故アイク生原（本名・生原昭宏）。亜大監督を退任後に大リーグのロサンゼルス・ドジャース球団職員となり、日米

武蔵工大二

## 大輪弘之監督×菊池涼介選手

球界の懸け橋となった功労者として知られる。

「生原監督はノックやランニングなど基礎練習の時間が本当に長かった。基礎が身につけば、選手が持っている素質が追いついてくるという考え方だった」

1966年、縁があつて信州工の監督に就任した大輪は、生原の指導法を持ち込んだ。たとえば、内野ノックでの送球。「正しい軌道で一番強い球を投げる」を意識させるために上手からしっかり投げるよう求め、小手先の横手投げは許さなかった。2時間

を超えるノックもあった。野球場に向かうバスでは居眠りを厳禁とした。試合に臨む意識を高めるのが狙いだ。

菊池は、東京の中学時代に属していたリトルシニアチームの監督に勧められて入学した。「やんちゃな面もあったが、野球になると顔つきが変わる。真摯に練習に取り組む子だった」

その成長ぶりを実感した記憶が大輪にはある。ランニングは、隊列を組み、足並みをそろえて同じスピードで走らせた。不十分だと、やり直した。あるとき、菊池が「1周

で終わらせようぜ。そろえるぞ」と仲間を声をかけ、息がぴたりと合った。「チーム競技の野球は、仲間の気持ちをひとつにするのが大切。率先してチームをまとめる姿は実に頼もしかった」と大輪は目を細める。

「全ての事は心から始まる」。菊池が高校時代に大輪から教えられた言葉だ。「一口入り後も常に僕の中にあります」と菊池。

守備範囲ぎりぎりの「球際」に強かったので、強い打球をさばく機会の多い三塁手で起用された。送球も正確だった。走塁も「一級品」。特別に足が速いわけではないが、相手の守備位置や送球を見て、まんまと次の塁を陥れるのが得意だったという。打

菊池涼介選手（右）と握手する大輪弘之・元武蔵工大二監督＝2014年6月、広島市・マツダスタジアム（長野スポーツマガジン社提供）



おおわ・ひろゆき 1943年、東京都大田区生まれ。専大京王（現専大付）と亜細亜大で外野手。信州工監督として夏の長野大会で準優勝2度。春と秋の県大会では信州工と武蔵工大二を通じて優勝が各3度。

きくち・りょうすけ 1990年、東京都東大和市生まれ。2005年、武蔵工大二（塩尻市）入学。中京学院大から12年広島入り。16、17年のセ・リーグ2連覇に貢献、13年から5年連続ゴールドグラブ賞。

夏の甲子園出場をかけた全国高校野球選手権長野大会（朝日新聞社、県高校野球連盟主催）は、今年が第100回の記念大会。7月7日の開幕に向け、連載企画を始めます。第1部は指導者編。高校球児の養成に情熱を注いだ幾多の人物のうち、著名な選手を育てた5人の監督像に迫ります。

◇  
敬称略  
（辻隆徳）

# 神様が「走りなさい」と

あの選手 この監督  
2

「あれは賢い子でした。監督として苦勞したということ、ほとんどない」

山寺昭徳(72)は開口一番、そう語った。長野商の監督時代に教えた投手・金子千尋(34)は現プロ野球オリックスの印象だ。

今や日本球界のエース格に上り詰めた金子の代名詞は

長野商

山寺昭徳監督×金子千尋投手

「七色の変化球」。たぐいまれな技巧を駆使する頭脳派投手として知られる。「自分の直球ではプロで通用しない。いかに打たれない投球をするか。金子だからこそ、工夫を凝らして今の投球スタイルを編み出せた」と山寺は見る。かつては、直球でぐいぐい押すタイプだった。

長野市の中学時代に所属していたリトルシニアチームが時折、長野商の室内練習場を借りていた。3年のとき、「直球の切れの良さに引き寄せられた」と山寺。進学先は決まっていなかったというので「公立の星にならんか」と声をかけた。入試の合格者名簿を見ると、その名があった。

球威ばかりか、制球力が抜けていたリトルシニアチームが時折、長野商の室内練習場を借りていた。3年のとき、「直球の切れの良さに引き寄せられた」と山寺。進学先は決まっていなかったというので「公立の星にならんか」と声をかけた。入試の合格者名簿を見ると、その名があった。

夏も甲子園に、と意気込むチーム。だが、金子には「高校時代で一番つらかった時期」が訪れる。右肩痛で投球できなくなった。



金子千尋投手(左)のファンクラブ報告会でありさつする山寺昭徳・元長野商監督=2012年12月、長野市(長野スポーツマガジン社提供)

群。足も速く、野球センスは申し分ない。1年の夏にも登板させたい衝動にかられた。一方で、身長171センチ、体重60キログラムはプロ13年目の現在を下回ることで9センチと17キログラム。高級車クラウンのエンジンを搭載した軽自動車」とも形容された。「青白い文学青年」は、成長期に生じやすい体の痛みが悩みの種だった。

山寺は決断し、通告する。「お前のデビューは1年秋の新チームだ」と。そして、チームメイトより軽めの練習メニューを与えた。「量は少ないが、手を抜かず本気。だから、仲間から浮くことはなかった。それも賢さでしょう」

その1999年秋、長野商は北信越大会に進出。準決勝で金子は高岡第一(富山)を延長十二回、1-0で完封する。ボールぎみの低め直球が伸びる見逃し三振も多く、「高校時代の金子のベスト試合」と山寺。

翌春、古豪・長野商は68年ぶりで選抜甲子園に出場する。1回戦で岩国(山口)に延長十回の6-5で競り勝ち、2回戦では鳥羽(京都)に6-8で惜敗。新2年の金子は2試合とも救援で登板を果たした。

夏も甲子園に、と意気込むチーム。だが、金子には「高校時代で一番つらかった時期」が訪れる。右肩痛で投球できなくなった。

消沈する金子に山寺から指示が出た。走り込みの徹底だ。後に金子は「今は神様が『走りなさい』と言っているんだ、と教えられて納得した」と話した。重要な局面で示された恩師の的確な指導に感謝し、今も走り込みの大切さを説く。

試練を脱した金子だが、その夏の長野大会では決勝で松商学園に「あと1勝」が届かず、3年の夏は優勝した塚原青雲(現松本国際)に準決勝で屈した。

選抜出場記念誌『凱歌再び』に残した「夢の舞台のマウンドは最高だった。また、あのマウンドで投げたい!」という願いに球運が応えることはなかった。

「金子の投球で注目するのは右ひじ」と山寺は言う。腕を振り上げるとき、理想の直角形になっているのだ。「当時から金子はできていた。高校生はぜひ、見習ってほしいですね」

敬称略

(山田雄一)

## 大きくなるために試練

あの選手 この監督  
3

1991年の甲子園を沸かせたスター右腕が、中原英孝(72)率いる松商学園の上田佳範(44)だ。春の選抜大会で準優勝し、夏の選手権ではベスト8。活躍の裏には、敗戦をバネにする上田の気持ちの強さがあったと中原は評する。

187センチの長身を生かし、1年生の秋から本格的に投手に挑戦した。2年生の秋の北信越大会を勝ち抜き、全国の代表8校が競う明治神宮大会に出場した。中原が「一級品」と称賛する得意のカーブに対し、直球は137キロ前後。「直球がより速くなれば、カーブがもっと打ちにくい球になる」と中原は考えて

## 松商学園

## 中原英孝監督×上田佳範選手

いた。

準決勝の相手は国士館(東京)。中原は「カーブは打者1人に1球だけ」と制約を与えた。出場が確実視されていた翌春の選抜大会を見据え、「上田が一回り大きくなるため」の試練を課したのだった。試合は完敗。2本塁打を浴びた相手の4番打者には、5打席連続でフルカウントまでもつれたという。1球しかないカーブをどこで使うか、苦心のほどがうかがえる。「酷なことをした。でも、あれで

上田の闘争心に火がついた」と中原は振り返る。

選抜大会は1回戦で愛工大名電(愛知)の鈴木一朗(イチロー、現マリナーズ)との投手戦を制し、準決勝で国士館に1-0で雪辱。35イニング連続無失点の快投で準優勝に導いた。

夏の甲子園3回戦では、四日市工(三重)相手に延長十六回、207球を投げ抜き勝利。野球ファンに鮮烈な印象を与えた上田は高卒後、プロ野球日本ハムにドラフト1位

で入団。93年から野手に転向し、活躍は17年間に及んだ。中原は長野日大の監督を経て、2015年に開校した広域通信制のウェルネス筑北(筑北村)で古希を超えても球児を指導する。県内で歴代トップの甲子園通算14勝監督が、選手を育てる上で大事にしているのは「向上心を持っているかどうか」。だからこそ、あいさつや時間管理を含め、選手が日々の練習に取り組む姿勢を重視する。「上田は、たたかれた後に自分で気づいた。うまくいかなかったことに対して、次に向かう力が強かった」

中原の指導を、現在DeNAでコーチを務める上田はどう受け止めていたか。シーズンオフは「伸びる選手は冬場に伸びる」と中原がよく口にした言葉を信じ、汗を流したという。

甲子園で活躍できたのは何が大きかったのか、と尋ねると、中原からもらった「最初で最後」という手紙の存在を明かしてくれた。

2年生の夏、長野大会3回戦で東海大三(現東海大諏訪)に3-13でコールド負け。中原から渡された手紙は、普段練習メニューを記入する便箋数枚にわたっていた。当時の上田の状況を監督の目で書き込んであったという。4番打者とエースを担う上田は「お山の大将と映っていたんでしょね」。周囲への感謝、練習姿勢について「自分の意識が変わりました」。

後進を指導する立場となった現在、上田が大事にしている言葉がある。中原からもらった「耐える、辛抱、我慢」。けがなどで苦しむ選手に、同じ言葉を掛けて元気づけるといふ。

なかはら・ひでたか 1945年、池田町生まれ。松商学園3年で夏の甲子園に二塁手として出場。母校と長野日大の監督で甲子園に春夏11回出場、通算14勝。ウェルネス筑北では昨秋の県大会で初優勝。明治大卒。

うえだ・よしのり 1973年、松本市生まれ。松商学園のエースとして91年の選抜大会で準優勝、選手権大会では8強。プロ野球日本ハム、中日で活躍し、2008年引退。現DeNA外野守備走塁コーチ。



松商学園硬式野球部の卒業記念写真に納まる中原英孝監督(当時、前列中央)と上田佳範投手(前から3列目の中央)=1992年3月、松本市(金森達夫さん撮影)

# 1年生ためらわず起用

あの選手 この監督

4

県内屈指の名将として知られ、「甲子園請負監督」と称された中村良隆(76)が、佐久長聖を最後にユニホームを脱いだのは2011年秋。20歳で母校・丸子実(現丸子修学館)を選抜甲子園に導いてから半世紀が経っていた。

高校野球は「教育の一環」とされる。しかし、中村は「一環ではない。教育そのものです。野球を通じての人づくり。それを信じてやってきました」と言い切る。

1960年の母校卒業時に「実習助手で残るように」といわれ、野球部コーチに。61年に教員資格を得ようと通信制で中央大に入学。8月から新チームを任せられると、いきなり秋の北信越大会に進出し

## 丸子実

### 中村良隆監督×堀場秀孝選手

て優勝。12月生まれで、まだ19歳の若手監督だった。その後の球歴も輝かしい。夏の甲子園の初陣は23歳の65年。丸子実は県勢で戦後初めて夏の2勝を果たし、ベスト8に入った。教員採用試験に合格して67年に須坂園芸(現須坂創成)へ移り、強豪校に。70年に中村が母校に復帰すると、その夏、「教え子対決」となった長野大会準決勝で須坂園芸が丸子実を破り、一気に初優勝。88年夏、上田東を初優勝に導いた中村は、全国制覇する広島商に初戦で

延長の末に惜敗した。91年、中村は佐久長聖の前身にあたる私学の佐久に移る。屈指の実力校に育て、94年夏には甲子園でベスト4。これは戦後の県勢で夏では唯一の最高記録である。これほどに豊かな足跡である。育てた優秀な選手も数多い。今回の取材で「最も印象深い教え子をあえて1人、挙げてもらうとすれば」と難問をぶつけてみた。しばし、思案の中村が口にしたのは「やはり堀場かなあ」だった。

堀場秀孝(62)。「最大のライバルだった」という松商学園に公式戦で初めて勝った72年、そして73年に夏春夏と3季連続で甲子園に出場した丸子実の黄金時代を支えた捕手。3年時と、その後の慶応大、社会人野球プリンスホテルでも主将を経験し、プロ野球では広島などで活躍した。現在は県議会議員でもある。「体は硬かったが、教え子の中でもパンチ力は抜群だった。1年の夏、ためらいなく正捕手で起用した」。パワーの源泉は食欲にあった。遠征先の旅館では、ご飯4杯分のおひつ4個、つまり16杯をたらいらげ、中村を驚かせた。堀場が3年の夏、すでに全国優勝の経験校だった箕島(和歌山)と初戦で対戦し、

9-4で快勝する。2本の三塁打を含む3安打で4打点の4番打者・堀場が一気に評価を高めた試合でもあった。このとき中村は31歳。最も心がけていたのは「2死から、いかに得点するか」だった。「それが粘り強さにつながった」と話す。個性的な選手ぞろいの中で、チームを束ねる求心力となっていた。堀場が監督・中村について振り返る。「まだ若かったが経験は豊富で、この先生についていけば勝てると思っていました」。65年の夏に8強入りした当時の先輩たちが中村を慕って練習を手伝いに駆けつけてくれ、さらに当時の丸子町が地域をあげて応援してくれたのも、「とても心強かった」と堀場は懐かしむ。

夏の甲子園に向けて激励を受ける丸子実の中村良隆監督(左)と長野大会の優勝旗を手にする堀場秀孝主将=1973年8月(中村良隆さん提供)



なかむら・よしたか 1941年、旧東内村(現上田市)生まれ。丸子実(現丸子修学館)卒業の60年に指導者の道へ。丸子実、上田東、佐久・佐久長聖の監督で春夏の甲子園に13回出場し、通算9勝。中央大卒。

ほりば・ひでたか 1955年、上田市生まれ。丸子実では72、73年に夏春夏3季連続甲子園出場。慶応大、プリンスホテルを経て83年からプロ野球で8年間、広島、横浜、巨人に在籍。2011年から県議。

1年浪人して第1志望の慶大に進学。現役合格がかなわず、他大学へ進んだ甲子園同期組も出るなか、「信念を貫いた堀場には芯の強さを感じた」と中村。それを目の当たりにした後輩たちが堀場の後を追って進学していった姿に、中村は伝統が培われていく力を感じたという。|| 敬称略(山田雄一)

# 自分で考える力で「育つ」

あの選手 この監督

5

プロ野球・楽天の聖沢諒(32)は、俊足好守の外野手として知られる。松代の高校時代は遊撃手。3年間を通じて監督だった柳沢博美(58)には、むしろ強打の印象が強い。「中学は軟式野球だが、打球をバットの芯でとらえる打撃センスは高校入学時から抜群だった」と懐かしむ。

1年の秋から4番打者を任せた。今でこそ身長179センチに体重72キロの聖沢も、当時は「ひよろひよろだった」と柳沢。それなのに、「バットコントロールはすばらしかった。打撃フォームを指示して身につけさせるのが一般的な指導法だが、聖沢にはのびのびと打たせた」という。そして、長所として柳沢が

松代

## 柳沢博美監督×聖沢諒選手

特筆するのが「自分で考える力を持ち合わせていたこと」だ。楽天入団の2008年から活躍し続けているのも、「この能力が大きな要因と思う」と柳沢は分析する。

松代のグラウンドはライト方面が深く、本塁から120メートルほどある。打撃練習で聖沢は、その石垣を直撃する打球をひんぱんに飛ばした。ところが試合になると、相手投手の配球を読み切り、確実性を求めてコンパクトな打撃に徹した。調子を落とせば、全体練習のあと、1人で最後まで

残って黙々とバットの素振りをする姿があった。

塁に出ると、打球フォームのクセを見つけた得意技を生かして盗塁を敢行。ノーサインの場面も多かった。「当時は飛び抜けて足が速かったわけではないのに」と柳沢。プロ野球で盗塁王となる素地がすでに備わっていたらしい。

しかし、チーム成績には恵まれなかった。「打倒私学」の高い目標を掲げたものの、同期が2人だけだった3年生の03年には長野大会の初戦で敗退する。卒業と入れ替わり

の後輩たちが06年夏、甲子園に初出場を果たして初戦を突破するのは、聖沢が国学院大に進んでからのことだ。

当時、すでに柳沢は他校に移っていたが、聖沢は柳沢に「後輩たちのおかげで松代の野球部が有名になり、誇らしいです」と素直に喜びを語ったという。

大学時代の聖沢が高校時代にも増して「ポジティブな思考をするようになったな」と柳沢が感心したことがある。「3分の1理論」だ。

一流の打者とされる打率3割に自信のあった聖沢は、1試合で3打席として「最初に凡退したら、残り2打席で安打の確率は5割。2打席凡退なら、3打席目は10割」と言

い聞かせて打席に向かう、と柳沢に話した。もちろん、思惑通りに運ぶとは限らないが、「前向きな考え方に徹して、ぶれない。大成する選手は、『育てる』ではなく『育つ』。その好例ですね」と柳沢は読み解く。

その聖沢には、柳沢からひどく怒られた思い出がある。死球を受けて試合途中で病院に直行した。打撲で済んだが、負け試合に。翌日、報告に行くと柳沢のカミナリが落ちた。主力選手なのに自覚が足りないという。「心配してくれなかったのにと納得がいかなかったというが、のちに聖沢は「チームのことを考えていなかった。がまんして試合に出るべきだったと気づいた」と語っている。

13年の日本一にも貢献し、実力は折り紙つきの聖沢だが、帰省時には柳沢への報告を欠かさない。次に足を運ぶ先は母校となる。今月から柳沢の勤務校が再び松代になったからだ。「これも一つの縁でしょうか」。その日を柳沢は楽しみにしている。

敬称略、おわり  
(山田雄一)

柳沢博美監督(右)にあいさつに訪れた国学院大4年の聖沢諒選手=2007年11月、長野市(柳沢博美さん提供)



やなぎさわ・ひろみ 1959年、坂城町生まれ。丸子実(現丸子修学館)で77年春の選抜大会に二塁手として出場。明治大卒。飯山南(現飯山)、丸子実、松代、長野商、丸子修学館から今春、松代の野球部長。

ひじりさわ・りょう 1985年、更埴市(現千曲市)生まれ。松代では遊撃手。国学院大を経て2008年にプロ野球の楽天に入団。外野手。12年にパ・リーグ盗塁王、13年には日本シリーズ初制覇に貢献。